

始めに

1913年(大正2年)4月の終わり、日米新聞の記者鷺谷精一はテキサス州サンアントニオから国境の町イーグルパス行きの列車に乗った。目的地はリオグランデ対岸の町、コアウイラ州ピエドラス・ネグラスで、彼には二人の同伴者がいた。一人はコアウイラ州知事で四年後、革命の動乱を制して大統領に就任するベヌスティアノ・カランサの参謀バルデス、もう一人はベヌスティアノの甥サリナス・カランサであった。車中バルデスから突然「君は銃器など持っていないだろうね」と問われた鷺谷は持っていると言った。サンアントニオの友人が護身用にくれた短銃が荷物の中に入っていた。「国境ではアメリカ軍の兵士が厳重な検査を行い、銃器が見つかるとうるさな問題になる」とバルデスの警告を聞いてから鷺谷の頭の中はそのことで一杯であった。

列車はメスキートや樺の低木がまばらに生えた荒野を南に向かっていた。春先に咲く色とりどりの野花の季節は終わり、すでに夏の気配すら感じられた。列車は意外に早くイーグルパスに到着した。大きな荷物を担いだ二人の同伴者の後に続いて橋の袂まで来て、検問所は無いのかと思ったが、検査官は橋の中央に居た。心配していた検査は簡単に終わり、幸い何事もなくメキシコに入国した鷺谷はほっと胸をなでおろしたが、インターナショナル・ブリッジを渡ったその瞬間から、自分の行動が一部始終アメリカの諜報機関により監視されていたことには気付かなかった。

二月ほど前、革命政府大統領フランシスコ・マデロと副大統領ピノ・スアレスがジェネラル・ビクトリアノ・ウエルタによって暗殺され、メキシコの政情は混迷を極めていた。加州では排日土地法、1913 The California Alien Land Law が制定され、カリフォルニア日系人はもとより、日米関係の前途に暗い影を落としていた。こうした中、在留日本人の間でメキシコへの関心が一挙に高まり、日米新聞は連日メキシコ関連記事をトップで報じていた。メキシコ人が反米であり、親日であることを強調し、さらにこれを利用してアメリカに対して一矢報いんとする論調が盛んであった。更に、メキシコ人が日本人に対して好感情を持っているのは単に米国に対する面当てではなく、メキシコ人は日本人を同一種族と考えていること、それに日露戦争で小国日本が大国ロシアに打ち勝ったことで益々彼らは日本を称え慕っているのである、と当時の加州在住邦人は考えていた。

メキシコ移民を最初に提唱したのは1891年5月、外務大臣に就任した榎本武揚であった。彼はヨーロッパへ留学したときの経験から、領土の狭い日本が人口問題を解決するには移民しかないと考え、就任後間もなく移民課を設立した。その頃サンフランシスコ領事から、メキシコ政府が国内の開発手段として外国人移民を積極的に受け入れているという話があり、調査団が派遣された。その報告をもとに、横浜のメキシコ領事に斡旋を依頼すると共に、在メキシコ藤田領事代理を通じてメキシコ政府農商務殖民大臣マヌエル・フェ

ルナンデスにも申し入れた。¹

メキシコ政府はグレロ州二箇所、チャパス州八箇所の官有地を払い下げると回答した。中でもチャパス州はコーヒー栽培に適した好条件の地であると推薦してきた。榎本は慎重を期し、殖民協会から二人を現地調査に派遣した。派遣された一人、根本正はチャパス各地を調査して、ソコヌスコはこの上なく地味豊かで、コーヒー栽培で巨額の利益が得られるだろうと報告した。榎本は二人目、橋本文蔵農学士を今度は農学的見地から調査するため派遣した。彼は報告書の中で、ソコヌスコ郡エスクイントラ付近はコーヒー栽培と牧畜、蔬菜づくりに好条件の環境にあり、殖民には最適の地であると結論付けた。その結果、愛知県と兵庫県からの契約移民 29 名及び岩手県と愛知県からの自由移民 6 名が 1897 年(明治 30 年)3 月 24 日、横浜からアメリカ船ゲーリック号で出発しチャパス州ソコヌスコを目指した。このメキシコ最初の移民団を「榎本移民」と呼ぶ。途中船を乗り換えたアカブルコで一人が死亡、プエルト・マデロで上陸し、熱暑の中を二週間あまり、重い荷を担いで歩き、やっと目的地にたどり着いたのは 5 月 19 日であった。²

一行が驚いたのは、開墾地は岩だらけの斜面で、既にコーヒーを植える時期は過ぎていた。何よりも致命的であったのは、送られてくるはずの資金が届かず、同行した団長格の技師は資金を求めて日本へ帰ってしまった。この榎本植民地は事実上、わずか三ヶ月で崩壊した。しかし、艱難辛苦を乗り越えて残った愛知県出身有馬六太郎、山本浅次郎、鈴木若、岩手県出身照井亮次郎、宮城県出身高橋熊太郎、清野三郎の六人は共同で事業を興し、出身地の三河と奥州の名前を取って「三奥組合」と呼び、メキシコにおける日本人移民の基礎を築いたのである。³

1895 年と 1900 年に行われたメキシコ国勢調査によると、メキシコに住んでいた日本人はそれぞれ 22 人、41 人であった。⁴ 世紀が変わると、いわゆる出稼ぎ移民が移民会社によって大量に送られるようになった。これは悪化する日米関係と深いかかわりがある。米国西海岸で日本人労働移民に対する反感が高まるのを受けて、1900 年 8 月、日本政府は米国本土およびカナダへの労務移民を自粛した。

この時点で、ハワイ及びメキシコへの労務移民はまだ禁止されていない。そのためにメキシコに大量の労務移民が送り込まれることになる。二年後、日本政府は規制を若干緩め、以前移住して、帰国していた者への再渡航、並びに移住者の家族の米国への渡航を許可した。しかし、ハワイから大量の移民が本土へ移動したため、1907 年 3 月、ルーズヴェルトは大統領令により、ハワイあるいはメキシコを含む第三国経由の移民の受け入れを禁止した。米国政府は、大統領令が遵守されるよう日本政府に協力を求めたため、これを受けた日本政府は 1908 年の夏、アメリカと紳士協定を結び、パスポートの支給を外交官、学生、貿易関係者に制限したためメキシコへの労務移民も中止されることになった。

メキシコ移民が送り込まれた先は、大別すると三つの地域で、オアハカ、ベラクルース両

州にまたがるテワロンテペック地峡沿いにあるオハケーニャ、ブエナ・ヴィスタなどの甘蔗耕地、次に、コリマ州のコリマ鉄道建設、そして、北部コアウイラ州エスペランサスやフエンテスなどの炭鉱地帯である。⁵

熊本移民会社は1901年(明治34年)以降、12回合計1,242人、コアウイラ州の鉱区へ、東洋移民会社は12回に亘り計3,046人を北部鉱山及び炭鉱へ、大陸移民会社は4千人以上を主としてオハケーニャ甘薯耕地やコリマ鉄道へ送り込んだ。⁶

メキシコにやって来た日本人移民の正確な数を割り出すことは難しい。「日本人メキシコ移住史」は、移民会社三社以外に、小規模に移入された出稼ぎ移民もあり、キューバの砂糖耕地労働者として渡航途次、居座り移住した者、ペルーからの北上組目等々を合わせると、1908年(明治40年)契約移民が打ち切られるまで、推定一万人の日本人移住者がメキシコに渡来したとしている。特に1906年と翌年の二年間に全体の九割近い数の契約移民が殺到した。⁷ 殆どの日本人は最終目的地をアメリカにしていたため、到着間もなく職場を離れて北へ向かった。しかし1908年、アメリカは日本人に対して門戸を閉ざしたため、多くが密入国を断念してメキシコ北部に留まった。革命が勃発した1910年の国勢調査によると日本人は2,216人、動乱の舞台となったアメリカに隣接する州に、全体の六割がいた。⁸

1970年代の初め、八十歳以上のメキシコ在住日系人をインタビューし、その記録を出版した村井謙一の「パイオニア列伝」、そして日本人メキシコ移住史編集委員会の「日本人メキシコ移住史」に登場する日本人は、親切なメキシコ人から助けられ、九死に一生を得た、と語っている人が少なくない。一見して日本人と見分けの付かない中国人は逆に、メキシコ人の激しい憎悪の対象となった。1911年5月、マデロ革命の最中、コアウイラ州トレオンで中国系住民六百余人の半数近くが、僅か数時間の間に、革命兵士と住民によって惨殺された。1930年代にはソノラ、シナロアを中心とする北西部で数千人の中国人が州外追放となり、さしもの繁栄を誇った中国人社会が壊滅した。アメリカへ逃げ込んだ中国人を、移民局はサンフランシスコまで無料で送り届け、多くが現地妻と子供を連れて帰国した。しかし、多くのメキシコ人妻は既に結婚していた夫の家族と一緒に暮らすことになった。ラサロ・カルデナス大統領は窮状を見かね、日中戦争開始直前、引揚げ船を送って中国在住メキシコ人を救出した。⁹

「日墨交流史」は中国人が経済的成功を収めていて、メキシコ人から妬まれたことを最大の理由としている。日本人は数の上で中国人より遥かに少なく、共同生活をしていざいざ数人単位であり、メキシコ各地に分散していたため、目立つ存在ではなかったし、経済的に大きく成功した者もいなかった。

経済的な要因以外に、日本人への危害が及ばなかった理由として考えられるのは、中国

人はディアス政府や州政府との関係が深かったため、ひとたび革命の嵐が吹き荒れると、たちまち革命軍の格好の標的となった。一方、日本人はメキシコ革命の動乱の最中、武器を取ってメキシコ人と肩をならべて戦った。彼等は政府軍、革命軍の区別なく、自らの置かれた立場や状況に応じて戦闘に加わり、目覚しい貢献をした。鉱山の閉鎖で職を失った日本人が糊口を凌ぐため、イデオロギーに関係なく革命戦士となった。一日一ペソから一ペソ半の給金は鉱山労働者の賃金の倍近く、食事の心配もなかった。皆が経済的な理由のためであったとは限らない。砲声を聞いて血沸き肉踊り革命に投じた者、日本人は勇敢であると信じられ、無理やり前線に連れて行かれたものも少なくなかった。多くの日本人が革命戦争で勇名を馳せ、ジェネラルに上り詰めたものもいた。一人はタンピコで医院兼薬店を開業していた岡山県出身の横山猪和夫、もう一人は二世のアルフレド吉松である。¹¹

メキシコ革命の関が原、セラヤの合戦のあった1915年4月頃、戦場の北方にあるサン・ルイス・ポトシの日本人会は、市を通過する軍隊に日本人を見付けると質問した。それら日本兵から得た情報をもとに革命に投じた日本人を、ピヤ軍50名、カランサ軍230名、既に戦死した者67名と推定した。また彼らは糊口をしのぐために軍隊に入るのは決して良いことではないと、日本兵に軍服を脱いで止まるよう説得に努めたという。¹²

母国の力が影響を与えたことも否定できない。日清日露の戦勝国と、辛亥革命後未だ混沌とした支那では大きな違いがあった。¹³ 国力の差がメキシコ人の見る目に大きな影響を及ぼしたことを示すエピソードがある。パイオニア列伝の中に、既に故人となっていた福岡県出身、野上茂実の話である。「・・・彼は経済的に身の堅まるや、色白で美人の小学校校長を勤めていた女教師と結ばれ、二男一女に恵まれたが、同夫人は教育者たるにかかわらず、『自分は今まで日本人は一等国民と思い、夫を敬愛していたが、日本の惨敗でメキシコ以下の三等国民になり下がった。そのような国民と夫婦生活を続けるのはいやだ』右の理の通らぬ夫婦解消の詭弁をつきつけられた氏は激怒してただちに離別し、以来三十余年、子女や友人の仲介あっせんにもかかわらず頑として忠告を耳にせず、彼女の家の敷居を踏むを快しとしなかった・・・」¹⁴

日本人と中国人の国民性の違いを理解していたメキシコの識者がいたことも見逃せない。二世で日本人移民の研究家、Maria Elena Ota Mishima は著書「Siete Migraciones Japonesas en Mexico, 1890-1978」で、1874年、金星が地球に大接近したとき観測隊長として日本へ行ったフランシスコ・ディアス・コヴァルピアスの言葉を伝えている。「・・・私は、我が国では少ししか知られず、一般には混同されているこの二つの国民性の違いは、両者の性格と習慣的な行動精神の違いに起因すると主張したい・・・しかし、中国人が日本人と類似性を持つどころか、逆にその性格とは対照的に、顔立ちは驚くほど良く似ている。日本人は実に、だいたい何時でも愛想が良く、礼儀正しく、勇敢で几帳面、そしてあ

らゆる文化を素直に受け入れる。一方中国人の中で同じような特性を持った者は稀である・・・メキシコにとって中国人移民が有益であると考えている人は、中国人を近くで見たことがないと私は思う。彼らには他所者と混じろうとしない欠点がある。この国では日本人は知られていないが、農業では確実に恩恵を蒙ると、私は信念を持っている」¹⁰

革命の騒乱とそれに続く政情不安の二十余年、日本人移民は良く耐えた。しかし、彼らの前途には更なる試練が待ち構えていた。太平洋戦争が開始されると、国境から百キロ、海岸から五十キロ以内に住む日本人は即時退去を求められ、土地財産をたちどころに失うことになるのである。

1. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室P146
2. Ibid. P146
3. Ibid. P161
4. Maria Elena Ota Mishima “Siete Migraciones Japonesas en Mexico, 1890-1987” El Colegio de Mexico, 1982 C-5
5. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、P246
6. 日本人メキシコ移住史編纂委員会「日本人メキシコ移住史」、1971, P110
7. Ibid. P110
8. Maria Elena Ota Mishima “Siete Migraciones Japonesas en Mexico, 1890-1987” El Colegio de Mexico, 1982 C-5
9. Evelyn Hu-Dehart, “The Chinese in Northern Mexico”, Journal of Arizona History P85
10. Maria Elena Ota Mishima “Siete Migraciones Japonesas en Mexico, 1890-1987” El Colegio de Mexico, 1982、P-12
11. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、P384
12. 日米新聞 1915年4月29日
13. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、P411
14. 村井謙一「パイオニア列伝」1976、P94